

## 書の余滴より

鍵岡正謹

ほくは書が好きである。書は美術で有るとか無いとか、書は芸術で有るや否やといった明治近代以降の論争や、書は美術館の収集作品になることが少ないとか、前衛書道の「墨美」がアンフォルメル絵画に近いとか云う話とは全く別に、ほくは書字が好きである。▼大学生のとき西川寧先生に教わり書の深遠さを知り、同じころ絵を見てもらっていた中川一政先生に書を教わった。お二人の先生の書にも惹かれていたが、奇しくもおふたりに黄庭堅の臨書を奨められ、書の面白さに目覚めた。▼書は豊かな世界であった。中国の篆・隸・草・行・楷の書体と、漢字から創られた日本の万葉がな・ひらかな・カタカナの書体から生まれ、連綿と伝わる書跡の名品を見る楽しさ。文房四宝(筆・硯・紙・墨)の世界も、これまた楽しい。▼ほくは中国の書聖王羲之や顔真卿、懷素や米芾に魅せられ、郭沫若や毛沢東まで続く中国書に敬意を払いつつも、空海と良寛に最も惹かれ、高村光太郎の書字に魅せられた。▼ほくは彼らの複製された書字を臨書した。嗚呼、それなのに何たることか、未だに解説不可といわれる字を書き、ただただ己の乱筆を恥じる。この原稿も万年筆で書いているが、また然りかも。▼『岸田吟香・劉生・麗子』展に、吟香の書が出品された。近年、吟香は多方面からの再評価が高まっている。吟香は漢隸体の書をよくしたといわれ、書家吟香も再評価されだした。▼文化勲章受章記念展となった『高木聖鶴』展では、現在書家の清楚で良心的な佇まいと、持続してきた吉備文化の精華をみるおもしろいとする。

岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

## 編集後記

大山真季

美術館ニュース105号をお届けします。この館ニュースの表紙では「美術館の紹介」ということで、建物に関する豆知識をご紹介しますが、この度当館は竣工から25年～30年の建築物を対象にした「日本建築家協会25年賞」を受賞しました。重厚感のある佇まいは最高裁判所も手掛けた岡田新一氏設計によるものですが、当館すぐ近くのオリент美術館も岡田氏が手掛けた建築物です。また、当館の裏手にある天神山文化プラザは日本近代建築の巨匠・前川國男氏によるものです。当館にお越しの際は美術作品だけでなく建築にもぜひ注目してお楽しみ下さい。

## 「美術館の紹介」vol.5

イベントホールの内壁に使われている  
タイルは紬をイメージしている。  
その昔、船で瀬戸内海を渡り岡山にやって  
きた女性たちが、現代のあでやかな衣装を  
身に纏い神楽を行う様を想定し、それに相  
応しい織物風の色彩が空間全体を演出している。



# もっとも遠い日本の、いまだ観ぬ美術へ

高嶋雄一郎(学芸員)



トバス強制収容所跡地(アメリカ合衆国ユタ州) 当時収容者が使っていた石炭が放置され、白い大地の一部が今もお黒く染められている。

最果ての地、とはここなのかもしれない——草木も枯れ果て、人はおろかどんな生物の息吹も感じられないような荒野に足を降ろしたその時、ふとそんな思いがよぎった。自らの生まれた場所や育った土地がある一方、決して足を踏み入れぬままにいる世界がこの地球上に無数に広がっていることを、我々は自ずと知っている。自らが訪れてきた場所と、決して訪れることがないその彼方の土地。その境目を「最果て」と呼べるのであれば、自分はその間に立っている。そう思われたのだった。

二月上旬からの一ヶ月間、ある日本画家の足跡を辿るためにアメリカを巡った。彼の名は小圃<sup>おぼた</sup>千浦<sup>ちうら</sup>(1885-1975)。現在の岡山県井原市に生まれ、画家であった兄に養子入りするため仙台へと移住、その後に出で<sup>むら た たんりょう</sup>邨田丹陵のもとで日本画を学ぶも当時の画壇のあり方に反発し渡米、サンフランシスコに暮らしてはヨセミテの雄大な自然を日本画で描くなどして知られた画家である。調査時もデ・ヨング美術館には彼のヨセミテを描いたものを含む大作が三点展示されており同地での高い評価が窺えたが、日本国内には彼の作品が殆んどなく、その知名度も評価も日本人にとっては依然定かではないのが現状だ。よって本調査は、日本初となる彼の回顧展が数年後に開催可能かを模索すべく遂行された。

小圃はアメリカで数多の困難に直面したが、それらは日本からの移民が辿った受難の歴史と軌を一つにする。人種差別、低賃金での過酷な労働、くわえて徐々に悪化する日米国交の中でも、小圃は生来の才覚そして不断の努力をもって次第に画家として名を上げ、1930年代には同地で幾度か個展を行ない画業も軌道に乗っていた。しかし、1942年に在米日本人の生活は急転してしまう。第二次世界大戦の勃発にともなう、敵性外国人としての強制収容所への収監である。サンフランシスコ在住の日本人の財産は殆んどが没収され、彼らは南部のタンフォランにある元競馬場内の厩舎跡地へと連行されたのだった。そしてさらなる強制移住地が、今回の調査で私が訪れたトバズだ。それはユタ州ソルト・レイク・シティから南へ車で3時間程度、遠くに穏やかな稜線が連なるだけの、凍るような寒風が吹きすさぶ大地の只中であつた。近隣の町デルタが経済的恩恵を期待して同収容所を誘致したそうだが、当時の町の人口3500人に対して収容者数は8000人にも達したという。調査の時期が晩冬だったこともあってか草木はまるで白骨のように乾き切っており、回りの静寂に呑み込まれるかのように、私は同行してくれた日系三世(彼の祖父も収容者だったという)にかける言葉も見つけられずその場に佇むしかなかった。

その荒野をしばし彷徨いながらひとり模糊とした思いを反芻するうちに、最果て、という言葉へとまとまっていったのか。まず一つに、日本人にとっての最果てという思いがあつただろう。私と同じ日本人が、ただでさえ遠く海を隔てた地に移住しながら、期せずして国家間の思惑に翻弄されては、在米日本人というその一つだけの理由でどこにも通じぬ僻地へと縛り付けられたのだ。この収容所の行く末には、死しないように感じられたかもしれない。実のところ、130人の収容者がここをその終焉の地としている。

くわえてこの地は、美術にとっても最果ての地だったのかもしれない——というのは、実は小圃はじめ幾人かの芸術家たちの強い働きかけにより、強制収容所内に美術学校が設けられたからだった。1932年からカリフォルニア大学パークレー校で教鞭を執っていた小圃は、どのような環境下でも教育は必須と考え、また美術こそが最も建設的な教育であり平和へと通じると固く信じていた。こうして、彼のみならず他の詩人や芸術家らの尽力によって多彩な科目が設けられる。私が現地で見にした収容者の遺品には、収容者の製作した小さな細工物や絵、自作した調度品、能や小唄などの台本があつた。こうした創作活動が、収容者の心に対し実際にどう働きかけたかは今となっては知る由もない。しかし、この収容所を出たのちに画家を志した人物もいる。極限の状況でなお、美術が為しうるものがわずかでもあつたのか。とするならば、美術に従事する者として救われる気がした一方、この地にあつたいまだ自分の知らぬ「美術」と彼らがそれに託した願いに、心を震わせずにはいられなかった。

なぜ、いま小圃千浦なのか。思うに、3年前に東日本を襲った未曾有の災禍を機に、我々もいつの間にか文明の最果てに足を踏み入れてしまっていた、と気付かされたからかもしれない。あの状況で、そしてそののちの世界で、はたして美術に出来る何かがあるのだろうか。その手がかりを模索するために、我々はいま、この最果てに囚われた日本人たちの、極限での美術を参照しなければならないのだ。

# 初公開の仏像と仏画

中田利枝子(学芸課長)



左:《釈迦如来立像》中:県指定重要文化財《阿弥陀如来坐像》右:《薬師如来立像》全て安養寺



《三千仏図》3幅のうち(未来) 岡山寺

2階展示室(岡山の美術展)では、久しぶりに、仏像とその姿にまつわる絵画・文書を、県下寺院から御出品いただき公開しています。

仏像は、和気町安養寺の秘仏本尊である「三世仏」。仏画は、岡山市岡山寺と玉野市金剛寺の「三千仏図」、文書は「三千仏名経」(岡山寺)。7件の作品のうち6件が初公開です(7月13日まで)。

今回のテーマは「過去・現在・未来の三世に満ちる三千の仏」。三世仏とは過去仏薬師如来・現在仏釈迦如来・未来仏阿弥陀如来の3如来をいいます。また、三千仏とは、過去世・現在世・未来世に存在する各1000仏×3世=3000仏のことです。

今この瞬間は過去となり、未来はやがて現在となる。今までに果てしない過去があり、未来のそのまた向こうに未来がある、その時空のそれぞれに仏が存在し、また生じる。あのお釈迦さまだっていくつもの過去世で善行を重ねた結果、悟りを得られたのだから、現在、未来、そのまた未来と功德をつめば、いつか、いつか、仏となる。そんな宇宙的な時空に広がる世界を表現しています。

さて、仏名会は、三世仏ないし三千仏図を本尊にして、罪を懺悔し、仏の力によって罪が消滅されるよう祈る法会です。岡山県下には、現在この法会を行う寺院は無いようですが、圓教寺(姫路市)では、歳末の法会として三

千仏礼拝行が続けられています。過去・現在・未来の三世に満ちる3000の仏の名を3日間にわたって読みあげ、一仏ごとに五体投地を繰り返す苦行です。

和気町にある安養寺は、宝治2(1248)年の年紀を最古とする多くの古文書と文化財を有する天台宗の古刹ですが、建武3(1336)年の古文書には、圓教寺の信源上人(10世紀後期の人)が草創したとあります。今回公開の仏像のうち、阿弥陀如来坐像(県指定重要文化財)と釈迦如来立像は平安時代の作、薬師如来立像は室町時代の作で、当初は別々に祀られていたはずですが、のちに3体一揃いの三世仏に編成されました。永正8(1511)年の古文書には宮殿を上棟した記録があり、同時期と見られる勧進帳に「本尊は釈迦弥陀薬師の三如来」と初見します。

岡山県南には「三千仏図」の伝世品が数件確認されますが、いずれもが15世紀中頃から16世紀初頃にかけての制作と見られます。この頃に、県南地方では、三世仏をお祀りしたり、仏名会を行うことが流行ったのではないのでしょうか。室町幕府が弱体化し、守護大名の抗争、戦乱の頻発する時代に、滅罪を願い、亡魂を供養をする仏名会が地方でも行われるようになったのは納得できます。大変な苦行であったと想像しますが、三千も描かれた小さな一体一体の仏が素朴で優しい表情をしていることがとても印象的です。

# 種をまく

—岡山県立岡山支援学校 出前鑑賞授業—

岡本裕子(主任学芸員)

昨年の夏、岡山県立岡山支援学校の先生から、出前鑑賞授業の相談を受けました。岡山支援学校は、肢体不自由児童生徒の特別支援学校で、今回の出前鑑賞授業参加児童は、小学部1-6年生9名です。そのうち3名の児童が、ペルテス病(※1)の治療のため、股関節を広げておくために特殊な車いすを使用しています。児童の様子を見学した上で、可能なプログラムの趣旨をこちらから紹介し、それに対して先生が、児童の実態を考慮しながら、プラスアルファの提案をしていくという双方のやりとりの後、今回の出前鑑賞授業は実現しました。

1-6年生みんなと一緒に楽しむことができ、かつ児童一人ひとりの思考を刺激することができるプログラムとして、〈○×クイズ〉をした後〈読み札カルタとり〉をすることとしました。〈○×クイズ〉は、12枚の図版の中から一枚の絵を絞っていくアートゲームで、「絵をよくみること」を促し、〈読み札カルタとり〉は、25枚の絵札カードの中から読み札にあう絵札カードをみつけていくアートゲームで、「絵をよくみること」と同時に、「他者の主観的な言葉から自分なりのイメージを膨らませること」を促します。〈○×クイズ〉は70名ぐらまで一度に行うことが可能ですが、〈読み札カルタとり〉は10名程度が床や机に車座に座って行うアートゲームです。今回は、ペルテス病の児童が使用している特殊な車いすの幅が広いこと(幅105-110cm、奥行き100-110cm)を考慮に入れる必要があります。〈○×クイズ〉は通常形で実施は可能ですが、〈読み札カルタとり〉は9名といえどもかなり広いスペースが必要となります。しかし、スペースが広がるとカルタが取りにくくなるというデメリットが発生します。先生の提案で、50枚の絵札カードを使用して、児童が2チームにわかれてのチーム



対抗戦という新しい形が生まれました。チーム戦とすることで、自分の手がカードに届かなくても、同じチームの子がカードを取ることができます(また、このことは個人差への配慮にもなりました)。さらに、雰囲気づくりのためにピブスを使用したり、遠くのカードを取るための「魔法の手(※2)」も登場しました。

『絵のじゅぎょうとても楽しかったです。とくに楽しかったのがかるたです。点数は負けただけ時間わすれて遊べました。絵をみることもすごく楽しいことを知りました。みんなとも仲よくとりくめたと思います。9人で相談したり、チームになって協力したりできてよかったです。この経験をもとに美じゅつ館に行ってみたく思います。』

『今日やった絵札カルタがとてもおもしろかったです。美術館・博物館の案内ガイドをありがとうございました。ぼくの家は、井原市にあるので、まず田中美術館に行ってみたく思います。岡本さんが教えてくれたように、いろいろな絵を細かいところまでよくみようと思います。そしてたくさんの方に気づきたいと思います。』  
—児童の声より—

学校と美術館の共通の思い—児童生徒に美術や美術館とよき出会いをしてほしい—が、児童生徒に届いた瞬間だったように思います。学校教育のコンテンツ(生徒の実態を把握している先生ならではの豊かなアイデア)と美術館教育のコンテンツ(鑑賞教育のノウハウや素材・教材)を介することで、児童生徒の心の中に、「美術や美術館との出会いの種」を蒔くことができたのではないのでしょうか。学校と美術館の連携は、双方の対話があってこそ初めて成り立つものです。今年度も一粒一粒「連携の種」を蒔いていきたいと想いを新たにしています。



(※1)ペルテス病とは、子どもの時に、股関節内の大腿頭骨部の成長軟骨部が障がいされる病気。  
(※2)「魔法の手」は、はえたたきの先に手のイラストを付けたもの。

## 新収蔵品紹介

### File 03

平成23—25年度の新所蔵品  
廣瀬就久(学芸員)



平成23,24年度 新所蔵品展(油彩画・版画・現代美術)展示風景[平成26年3月25日—4月20日]

当館では所蔵方針に沿った作品を収集していますが、ここでは平成23—25年度に所蔵した作品を、油彩画、版画、現代美術を中心に紹介します。

津山市在住の太田三郎(昭和25年生まれ)は、切手や消印を使う作品を発表したあとで、独自の切手制作を行うようになりました。23年度購入作品の《POST WAR 66 戦災痕》(平成13年)では、66年前の岡山空襲によって痕を被った立体物を、自作の切手の中に写真の形で掲載しています。戦災の記録が切手に留められていると言えるでしょう。同年度寄贈作品の《Seed Project》では、自作の切手のなかに、植物の種子と、採集地、採集日が記され、生命や種子との出会いが遺されます。

23年度に寄贈のあった劉生容(昭和3年—昭和60年)は台湾に生まれ、昭和42年から岡山在住でした。劉の作品を見ると、キャンバスに油彩のほか、コラージュとして紙を貼ります。これは中華文化圏で使用される紙銭を取り入れたものです。台湾人としての油彩画を目指した独自の作風です。

犬飼恭平(明治19年—昭和29年)は現在の倉敷市に生まれ、明治33年に渡米します。そして肖像画家として活躍し、米国で没しました。日本では犬飼の作品はほとんど知られていません。当館では24年度に、犬飼の最初の

収蔵作品として、油彩《静物》(昭和6年)を購入しました。黄変ワニスを除去した結果、描かれた瓶の青色や茶色が鮮やかになりました。またその他に購入した作品として、寺松国太郎(明治9年—昭和18年)の描いた女性像である油彩《追憶》(昭和4年)があります。当館には版画の所蔵はほとんどありませんでしたが、同年度に内田智也(昭和22年—平成21年)のエッチングの大作10点を受贈しました。またアオキスミエ(大正13年生まれ)の油彩作品の寄贈をご本人から受けています。

25年度については、平成19年に当館で個展を開催した坂田一男(明治22年—昭和31年)の、油彩《上巳》《堆積》を受贈しました。また独立美術協会所属の山本正(大正4年—昭和54年)と水野恭子(大正10年—平成25年)、そして光風会に所属した野平上(明治34年—平成15年)の油彩について、寄贈を受けています。

当館で平成20年に個展開催の柚木沙弥郎(大正11年生まれ)からは、近作の染色作品2点を、そして昨年個展開催の斎藤清(明治40年—平成9年)は、ご遺族から木版画2点を受贈しました。これらの平成25年度新所蔵品については、近世絵画、近代日本画、工芸を含めて、7月16日から8月24日まで展示の予定です。

## 展覧会スケジュール

7月  
July

6月6日|金|—7月6日|日|

### 【特別展】 文化勲章受章記念 高木聖鶴展

書家の高木聖鶴は、平成25年11月県内在住者として初めて文化勲章を受章しました。優美さと鋭さを兼ね備えた独自の書風を打ち立て、現在の仮名作家で最高峰に位置しています。本展は高木聖鶴の、青年期の作品から近作までを網羅した集大成の展覧会で、書道界を牽引した氏の業績を顕彰します。

5月30日|金|—7月13日|日|

### 【岡山の美術展】 生誕100年 岡本欣三の世界展

7月21日|月・祝| 14:00~15:30

### 美術館講座 「川端康成コレクションについて 東山魁夷と近現代の作家たち」

講師 廣瀬就久(当館学芸員)  
会場 地下講義室(先着70名)

8月  
August

7月16日|水|—8月24日|日|

### 【特別展】 巨匠の眼 川端康成と東山魁夷

ノーベル文学賞を受賞した川端康成は、幅広く美術品を収集しましたが、浦上玉堂の《凍雲飾雪図》や、池大雅と与謝蕪村による《十便十宜図》などが含まれます。また日本画家東山魁夷の作品も収集の柱となっており、本展では川端、東山の交流を取り上げながら、東山家にある東山作品と、東山収集の美術品もあわせて紹介します。

8月3日|日| 14:00~15:30

### 記念講演会 「川端康成と東山魁夷の交流」

講師 川端香男里氏(財団法人川端康成記念会理事長)  
会場 2階ホール(先着210名)

9月  
September

9月3日|水|—9月14日|日|

### 第65回岡山県美術展覧会

9月26日|金|—11月3日|日|

### 【岡山の美術展】 小野絵麻・二三 人間・幻想・自然展

8月9日|土| 14:00~15:30

### 美術館講座 「川端康成コレクションについて 国宝《十便十宜図》と国宝《凍雲飾雪図》」

講師 守安収(当館参与、吉備国際大学教授)  
会場 地下講義室(先着70名)

9月26日|金|—11月3日|月・祝|

### 【特別展】 光琳を慕う 中村芳中

『光琳画譜』を出版した中村芳中(?-1819)は、江戸琳派の酒井抱一とほぼ同時期に活躍した大坂画人で、たらし込みを駆使し、おおらかに描かれた花鳥やユーモラスな人物画などほほえましい作品を多く残しました。本展では初公開作品を多く含む芳中作品を中心に、琳派の画家や、当時の大坂画壇の作品もあわせて紹介します。

美術の夕べ

巨匠の眼 川端康成と東山魁夷展

ギャラリートーク

7月25日|金|、8月22日|金|  
各回18:00~

講師 当館学芸員

会場 地下展示室 ※要観覧券